

私たちはゆめをみる

松田恵美子

1

「次の方から、こちらの列に並んでください」

見覚えのある顔だな、と声の主を見て思った。色黒で鋭い目をしている。しかしどこで出会った人なのかすぐに思い出せず黙って言う通りにする。

「もう少し間隔をつめられますか？」

その男性は言った。

先月、階段から落ちて左足にギブスをはめていた。だから、地下の食料品店で買ってきた食材が入ったリュックを背中に、入りきらないお菓子や洗剤などの日用品が入ったエコバッグを右手に持った私はとても自由に動ける状態ではなかった。大正のイオンに入っているマクドナルドは、京セラドームでコンサートや試合があるたびに普段の10倍以上の人でごった返す。今日のマクドナルドは不自由な私には無理があったが、ここから抜け出したいと思った時には列が何重にも出来、身動きが取れなくなっていた。周囲はライブ会場で購入したと思われるお揃いのTシャツを着た人たちばかりで、顔まで同じに見えてくる。

「推しの色コーデ」

「お願い、もう一回やろ」

隣の列の女の子たちが何度もiPhoneで自撮りしているのが見えた。

荷物が重いせいで徐々に体がだるくなってきた。最初は久しぶりに食べるダブルチーズバーガーが楽しみで列に並んだが、人が増えていくばかりで一向に順番が回ってこない。周囲を見回すとまた先ほどの店員が列を正しているのが見えた。長身なので人より頭一つ分飛び出した顔だけがはっきり見える。手をあげる動作などをすると、他のお客に当たってしまいそうなくらい体が大きい。やはりどこかで見ることがある。

「結婚決まったよー」

「おめでと〜、この間言ってた彼氏？ 式はいつ？」

また別のところから女性の話し声が聞こえた。

疲れで意識が朦朧とする中、元彼を思い出したりして嫌な気持ちになった。20代の後半から5年も付き合ったのに他の女と結婚して、最近家を建てたと風の便りに聞いた。毛深すぎたところとか、顔にあった大きいほくろとか、あえてマイナスポイントを思い出していくうちに、さつきよりも気分が沈み、支えている右足のしびれが強くなっていく。エコバッグも重たくなっていくような気がする。気が遠くなりそうだった。

「荷物、持ちましようか。元は私のもでもありますので」

私の後ろに並んでいたふくよかな体をしたおじさんが、私の手からエコバッグを取り上げた。一気に体が軽くなる。

「松葉杖も持ちましようか？」

「大丈夫です。袋も自分で持てますので」

慌てて松葉杖を強く握ってバッグを取り返そうとする。

「この中にはみなさんからいただいた施しが入っています。困っている人を見かければ、今度は私が施しをするんです。持ちつ持たれつの関係です」

おじさんは聞きもしないことを勝手に話している。

「どうぞ、こちらは4つ入りのワッフルのひとつです。さぞかしお腹も空いてきたことでしょう」

おじさんは、バッグから私が先ほど買ったばかりのスイーツを取り出した。

「困ります、勝手に触らないでください」

思っているより大きな声が出た。

「橋下さん？」

横に2列分離れた所から、自分の名前を呼んでいる会社の後輩を発見した。

「休日にお会いするなんて。旦那と一緒にライブに来たんです。それにしても混んできますね」

河本良子だった。別の部署の優秀な社員とデキ婚しており、確か新婚旅行へ行くために長い休暇を取っていると思っていた。

「こちらが旦那です。と言っても知ってますよね」

旦那が遠慮がちに頭を下げるのが見えた。

「来週入社したら、新婚旅行のお土産持って行きますね」

他の客の邪魔になるくらいの声で叫んでいる。左手をこちらに向かって振っており、薬指につけた指輪が一瞬だけ光ったのをたまたま見てしまった。休日の昼ごはんを買いに来ただけだったのに、急に自分の年齢が気になりだした。河本良子にはできれば早く産休に入って欲しい。旦那のこと、新婚旅行のこと、話の全てを聞かされるのは耐えら

れなかった。大きくなっていくであろうお腹を見せつけられるのも嫌だった。とにかく私の望みは一刻も早く結婚を諦められる年齢になって完全なお局になってしまいうこと。「社内にあと何人、未婚の女性が残っているのかな？ 一、二、三、四、五、ごくろうさん。休日なのに社内みたいなメンツが揃ったね。橋下さん、ここ抜けてどっか他の場所へ食べに行く？」

並んでいる列の前方から会社の上司がこっちを向いて話しかけてきた。
「どうしてここに？」

他の客の邪魔にならない程度の声を上げる。この人はあえて言うなら好きでも嫌いでもない。ただ、わざわざ休日なのに一緒にご飯を食べるのは正直面倒くさい。

「ラ・イ・ブ」

上司は声を出さずに口を大きさに開けた。自分が着ているTシャツをこちらへ見せている。

「ごめんなさい、おじさんの相手している時間がないんです」

こんな失礼なことを言ってしまうなんて、申し訳なくて顔が上げられなくなった。先ほどからずっと片足で立っているのもう体も限界だ。

「大丈夫ですか？ 背負っているリュックも持ちましようか？」

先ほどバッグを勝手に持った後ろのおじさんがまた声をかけてきた。

「本当に大丈夫ですから、ほおっておいて下さい」

強い口調になった。もうエコバッグはくれてやる、くらいの気持ちになっていた。できれば関わりたくない。

「では、リュックから一番重たいものだけを取り出しましょうね」

おじさんはリュックのチャックを勝手に開けると、懐中時計を手にした赤いチョッキ姿の白うさぎを取り出した。

「ハリーアップ、時間がない。時間がない」

おじさんに耳を掴まれたうさぎが声をあげた。

「34歳、結構なお年頃だ。男性もろくな人は残ってないよね、ハリーアップ。癖が強いか、背が低い、男前だけど金がないとか、女遊びが激しいとか、バツイチも増えるよね、優しくてまともな男性は河本良子に取られちゃった」

うさぎは嫌なコメントだけを残しておじさんの手を振りほどき、急ぎ足でどこかへ行ってしまった。

もう何もかもどうでもよくなっていた。小さなマクドナルドの店内は、忙しそうに動き回る店員の姿が見えるのに向に列は進まないし、人は増えていく一方。

とうとう右足がしびれて立つことも難しくなり、地べたに座り込んでしまった。

「お客様、座り込んで他の方の迷惑になります」

見覚えのある長身の店員が列を割って入ってきた。もしかして、と思った。友人がずっと付き合っていた元彼かもしれない。友達3人とよく飲んでいる時に何回か写真を見せてもらっただけだが、背が高いなあと思ったので印象に残っていた。もう一人の友人は実際に会ったことがあるらしく、あまりよく思っていないというようなことを私に耳打ちしたことを何となく思い出した。

「無理です。体も気持ちも耐えられないくらい重いです。これ以上身動きをとることはできません。手足も動かせない、助けてください」

「成るように成ります、ケ・セラ・セラ」

店員が私にだけ聞こえるように耳元で囁いた。

部屋のベッドの上で目が覚めたときにはすっかり太陽が頭上にあった。窓からの光が眩しいくらいだ。足のギブスはついたままだったが、体全体が軽くなっていた。仰向けになりながら落ち着いてくると、あれは金縛りだったのかあと分かっただけいぶんほっとした。

「おはよう、『かなしばり』にあったわ、最悪やった」

ベッドから出て1階のリビングへ降りると、祖母が昼食の支度をしている所だった。

「そんな格好で会ってたの？ かなしばりさんって誰？」

祖母は柵からラーメンを取り出して袋を開けている。

「新しく知り合った人？」

祖母は何食わぬ顔で鍋に水を入れて火をかけた。

「もう少し待っててね」

さっきまで感じていた恐怖は何だったんだろうか。なんだか全身の力が下に落ちていったような感覚になり、ちよつとだけため息が出た。でも何だかホッとしたのも事実だ。

2

この世には、どうしてもやることもできない、救いようのない奴がいる。手を差し伸べてもプライドが邪魔して助けを借りられず、頭がいいものだから自分で何事も解決できると信じており、口も上手いものだから人を騙してしまったりして、結果、嫌われるタ

イブの人間である。友人である由紀子の彼氏である。

仕事を辞めた後、住宅展示場でアルバイトをしていた時のことだ。たまたま友人カッブルがデートで訪れた。飲みに行くたび由紀子から愚痴のようなノロケ話を聞かされていたので、彼氏のことは会ったことはなかったがよく知る人の一人になっていた。由紀子の話によると彼は司法試験浪人4年目で、とにかく話を盛って場を盛り上げたがる癖があり、そのため嘘も平気でつく。当時、20代も終わりに近づき、私たちはそろそろ結婚したくなる年頃でもあったのに、アルバイトをいくつか掛け持ちしているという状態。しかし彼は頑張っている、由紀子はそんなことをよく言った。ある日、彼氏と初めて会う機会に恵まれた。

「いらっしやいませ、こちらへどうぞ」

彼氏は写真で見るとより大きく見えた。色黒で、優しいというよりは挑戦的な目をしているなどというのが第一印象だった。由紀子は私を見つけると一瞬驚いた顔をしたが軽く会釈してくれた。

「アンケートへのご記入をお願いできますでしょうか」

用紙を渡そうとすると彼氏が先に手を出したので彼に渡すことになった。

デート中に立ち寄っただけだろうと思ったが、由紀子が指輪を左薬指にはめているのに気がついた。上司の松下さんはどうやら若夫婦だと勘違いしたらしい。住宅展示場で勤務している営業マンは、1ヶ月に1件契約を取らなければならないため、来客者の未来の可能性を見抜く力が必要だ。購入の可能性が少しでもあるなら、そのお客は大切にしたいところだ。

「営業の松下です、ご案内させていただきます」

アンケート用紙に目をやった松下さんは名刺を取り出して挨拶をした。

「名刺か、スーツのポケットに入れっぱなしやわ」

彼氏の反応に私と由紀子の目が合った。

「休日ですし、もちろん大丈夫です」

「まずはこちらにどうぞ」

松下さんは買い手に少しでも見込みがありそうだと判断すると、展示室のソファ席に案内する。そこからだと部屋のレイアウトが全部見渡せるからだ。

アンケート用紙に何が書かれていたのか、ソファ席へ案内した松下さんを見て不安になるが、すぐに終わるだろうと側で見守ることにした。由紀子も4分の1ほどしか腰をかけなかった。

「家は探しているんですがまだ具体的には何も決めていません。展示場は初めて来ました」

彼氏だけが大きい体をソファに沈み込ませている。

「うまく木が生かされた家で雰囲気いいな」

彼氏が由紀子の方を向くと、由紀子の顔が固くなり、松下さんが嬉しそうな顔を作った。彼氏は体が大きいので少しでも動くとも圧迫感がある。

「木をメインに使い、暖かみのある家をコンセプトに仕上げています」

松下さん、この人たちは夫婦じゃないよ、この男はアルバイトの掛け持ちで収入を大きく見せているだけ！ 私は目力で松下さんにメッセージを送った。

「この家で大体何坪ぐらいですか？」

深々とソファに座った彼氏は堂々としているように見えた。

「田中さん、お茶お願いします」

一瞬、耳を疑った。松下さんの方を向いて目を見開いたり、眉毛を上下させてみたが私の警告は伝わっていない。

「田中さん」逆に急かされる始末だ。

ベテランの松下さんが顧客を見間違えることなんてあるだろうか。アンケート用紙に記載された内容がますます気になった。話の進み具合が気になるので、雑にお茶を注ぐと先ほどの定位置へ急いだ。

「こちらのモデルルームで60坪、リビングは広めに作っています。展示用の住宅はこのメーカーさんもリビングを大きめに作っています」

戻ってくると話が盛り上がっていて驚いた。とりあえず床に腰を浮かした状態で膝について話を聞くことにした。

「こんなにリビングは広くなくていいよなあ？」

彼氏が由紀子に同意を求めている。

「そうやね」

由紀子の遠慮がちで小さな声が聞こえた。

「家ほどの当なりに建てるなど何か考えておられますか？」

話が進みそうになるので「おしまいっ」の意味を込めてしつこく何度も咳払いをした。しかし松下さんは相手にしてくれない。咳など聞こえていないという態度を頑なに続けている。

今日はゴールデンウィークド真ん中でイベントが盛り上がる日だ。いかにたくさんの人と話をして可能性がある家族を捕まえられるかが勝負の時。いつもなら1日に1組来

ればいいが、キャンペーン期間中なので玄関へ出て呼び込む方法だつてある。もうひとりの営業マンとサポートの池田さんは別のお客の対応にあたっていた。営業マン同士は助け合う仲間でもあるが、一応ライバル同士。狭い空間の中で戦い続けなければいけない関係でもある。

（こいつは本日最大のトラップだ）私はもう、叫んでしまいそうになるのを何とか堪えた。浮かしたままの腰が何度も上下してしまった。

「二人とも実家がこの辺りなので、どこがいいかなあ」

彼氏が眉毛をひそめる。悩んでいるフリだろうか。

「そうでしたが、互いの実家が近いところに住めるのはいいですね」

「ただ、東京に転勤もありえるのでどうしようかなあ。小田原とかもいいなと思って」
彼氏は由紀子に同意を求めているらしい。

私と由紀子の目が再び合った。由紀子と飲みに行った時の会話が脳内をうろついていた。そうだ、こいつの中にはもう何年も前に卒業した早稲田大学法学部時代の思い出が今もなお激しく強く残り続け、東京に住むことを妄想しているのだ。私は松下さんがますます不憫になった。

「これほどの家を建てようと思ったら実際どれくらいの期間がかかるんですか？」

矢継ぎ早に質問する彼氏は、私でさえ本当に家を買いたい人に見える瞬間がないわけではない。前情報がなければ本当に信じてしまったかもしれない。彼氏にとっては安い布団を高く売るくらい朝飯前だろう。実際に由紀子だって出会ってから4年、何度も嘘をつかれ、泣かされているというのに、彼が試験に受かる日のことをゆめ見続けている。

（松下さんっ……）私は気づけば再び腰を浮かしたり、下げたりしていた。声が出せないのでもうしても体が動いてしまう。トイレに行きたいと思われたかもしれない。松下さんがこつちを見て怪訝な顔をしたのが分かった。

「弊社はすべてオーダーメイドの設計になります。だいたい半年から1年かけて設計を進めるので、着工してからも考えると、完成するまで平均で2年かかる方が多いです」
「今すぐとりかかったとしても住めるのは先になるな」

由紀子はお茶を一気に飲むとコンッと音を立てて机に戻した。由紀子なりの合図なんだと分かった。

「こだわり続けると時間はどうしてもかかってしまいますから」

松下さんはお構いなしだ。

「しかもまさか平日に打ち合わせ、という訳にはいかんやろうから、土日が忙しくなるな」

彼氏は意気揚々としているかに見えた。

「マンションの方が楽でええかも」

彼氏は話聞いていた以上にプライドの塊だった。どうしても家を買う人に見られたらしい。由紀子はもう顔を下に向けていた。

「例えばこの辺りで、モデルルームくらいの家を建てようと思ったらいくらするんですか？」

もう話を切り上げたっていいのに、彼氏はまだ話をしていたいようだった。

「この北千里の辺りでしたら坪60から70万。土地と住宅を合わせると1億から1億5000というところでしょうか」

「まあ、それぐらいするよな。東京だったらどうなんかな？」

1億は想定内、という顔をした彼氏を見て私はもう呆れて吹き出しそうになる。松下さん、もしかして今日はラッキーとか思っていないよね。

「東京でしたら土地代が上がりますのでもう少し値は上がります。小田原も神奈川県ですが便利なので人気のエリアです。ところでおふたりのお仕事は？」

由紀子が口を開きかけたように見えたが、先に彼氏が答えてしまった。

「弁護士を」

「弁護士さんでしたか、それだったらかなり上までいけます」

松下さんがこの数ヶ月で一番嬉しそうな声を出した。今日は本当にラッキーだ、と思っただ、絶対そうだ。

「いや、そんなことはないです」

彼氏が謙遜している。

「いけます、いけます」

そして2人が大笑いしたので、由紀子は顔を歪めながら歯を見せた。私はまた松下さんに目力と咳払いを送った。

「大阪で建設はお考えではないですか？」

松下さんとしては何としてもこのカップルを手中に収めておきたい、といった様子だ。

「ふたりで相談して決めたいと思っています」

確かに彼氏は嘘をついていた。でも、と思った。ゆめは嘘とは言わないはずだ。彼氏は嘘をついているのではなく、アメリカンドリームを熱心に語っている青年なんだろうか。これまでだって、由紀子は彼氏を応援してきたじゃないか。なんだか頭がくらくらしてきた。私はまだ床に膝をついたままだった。膝小僧が痛い。

「せっかくなのでお部屋をご案内しましょうか」

彼氏は嬉々としているように見えた。

松下さんが立ち上がったのでみんなで一階を見て回るようになった。家族全員が集まっても有り余るスペースを確保したキッチンとリビング、平均より広めに作った風呂とトイレ。松下さんの説明がいつも以上に念入りに思えて仕方がなかった。

2階へ上がると先客の家族が子ども部屋を見学し終えたところで、まだ小さな男の子と女の子が2段ベッドの上ではしゃいでいた。

「子供が大きくなったらひとつの部屋を収納棚で区切って、2部屋に分けられるようになっていきます。ライフスタイルに合わせてレイアウトは変えていって頂きますよ」

サポート役の池田さんが私たちを見つけてやって来た。池田さんはこれまで何組もの若夫婦の購買欲を上げてきたベテランだ。

「さっきのお客は厳しそうだわ、セクスイに取られそう」

池田さんは私を見つけると耳元で小さく囁いた。

「次のカップルは若くて素敵ね」

「池田さん、この方たちは……」

今しかない、と思ったが池田さんは私の話を聞かずに由紀子の隣に張り付いた。

「お子様はまだですか？」

「あ、いえ、まだです」

由紀子の消え入りそうな声が聞こえて、私は背中が凍りつきそうになった。

「これからが楽しみね、若くて羨ましいわ。夫婦の寝室も案内するわね」

池田さんは由紀子の手を引っ張るように連れまわす。

「土地探しからでも弊社で行うことができます。もし不動産屋でいい土地が見つかった場合もおっしゃってください。土地と家を別々で考えるより、住宅メーカーも一緒に入しながら話を進めていく方が効率的ですの」

「心強いですね。如何せん、住宅展示場は初めてなので」

一方松下さんは彼氏を口説くのに必死に見えた。一通り見学して1階に戻ってきてようやく彼氏が時計に目をやった。

全身の力が抜けるようだった。

「そろそろ行かんとあかんな」

由紀子によくやく笑みが戻った。

「色々教えて頂きありがとうございます」

カップルが玄関で靴を履いている姿を見てやっと、この場が終わるときの安堵感。きつと私以上に由紀子はほっとしたに違いない。由紀子と私の目が遠慮がちに合った。彼

女のノロケではない愚痴が耳元で聞こえてくるようだった。

「ありがとうございます」

彼氏からは取り繕ってでも社会の枠の中で比較的高いところに鎮座したいと願うプライドがこぼれ出していた。

「松下くん、さっきのお客様どうする？ 見込み客に入れとく？」

事務所代わりの部屋へ戻ると池田さんが黒板に今日のお客様リストを書いているところだった。

「さっきはお疲れ様でした。なかなか良かったわね。田中ちゃん、売れたら実績にしてあげるわね」

池田さんがひじで脇腹をついてきた。

「いや、どうでしょうか、まだ若そうですし」

「弁護士さんはいけるわよ」

池田さんが声を弾ませ、松下さんも嬉しそうな顔をしている。疲労で思わずため息が出た。松下さんに本当のことを言うべきかどうか、このカップルの話題が出るたびに次も同じように悩むんだろう。自分は何も悪いことはしていないのに鼓動が早くなった。あいつはきつと、アンケート用紙にも存分にプライドを発揮させたに違いない。見なくてももう分かる、今度はもっと深いため息が出た。